

# 地理学から見た「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」

—— ベルギー国を中心に ——

大 嶽 幸 彦\*

(平成11年10月21日受理)

## 要 旨

本稿は、明治21年発行の「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」を地理学の立場から分析し、考察を加えたものである。今回は白耳義国之物五巻を取り上げた。本論では地理学的考察が可能な箇所を引用し、それらについて若干の考察を試みた。

## KEY WORDS

Reports of Investigation on Europe and the United States	欧米巡回取調書
Eye of Observation	観察眼
knowledge of Geography	地理知識

## 1 は じ め に

筆者は既に「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」を基に、フランス国、ドイツ国に関する記述の中から地理領域に関する部分を取り出し、分析と考察を行ったことがある<sup>1)2)</sup>。本稿ではベルギー国の取調書を地理学から分析対象とすることとした。取調べの内容はフランス国、ドイツ国の事例と必ずしも同一ではなく、担当する榎田書記官の得意な分野、特に農業・工業が中心になっている。従って、水産、山林、特許、地質等については言及されていない。ベルギーはヨーロッパの中心に位置し、海上からも陸上からも交通の便が良い点はよく知られている。しかし、当時の人口が600万足らずの小国を取調べる意義はどこにあったのであろうか。それは農工業が盛んであり、ベルギー政府が産業を保護奨励しており、殖産興業をめざしていた明治日本にとって参考となるべきものが多々得られると判断された(取調書, p. 1)からであった。取調べの内容は領事の配置及び商業博物館から始まり、農区及び巡回教師以下、21号の特報から成っている。これらのうち、本稿は商業博物館、巡回教師、アンヴェルス港(アントウェルペン港、筆者注)、商品陳列場、農業貸付金方法、製造学校、農業用分析所、小作条例、農大学校、ガン花園大学校、土地所有規則等について地理学の領域からの分析を試みたものである。

## 2 「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」白耳義国之物

先に述べたように、欧米巡回取調書は明治維新後のわが国の殖産興業に必要な法律や諸規則を蒐集してることが最大の目的である。従って、取調書の内容が地理領域を多々含んでいる

---

\* 社会系教育講座

かどうかは取調べにあたった担当者の興味・関心による。今回のベルギー国の場合にはそれ程地理的内容が豊富にあるとは思われない。本稿は地理学からの分析を目指しているのではあるが、出来るだけ取調書の報告順に従って検討することにした。

まず、本取調書の中心となるベルギー国の農工務兼工部省は1884年内務省より分離して置かれた省である。ベルギーの主な**官吏登用法**は次の通りである (pp. 9~11)。

- 1 官吏の登用は21才以上である。
- 2 退職年齢は65才以上で養老年金を受ける。但し、35年以上勤続しなければ養老年金を受けることができない。
- 3 養老年金は勤務が終り、5ヵ年間の現俸を平均して其60分の1を勤続年数に乗じて得た金額である。仮に勤続年数35年とすると現役時の約60%となる。
- 4 勤続年数の計算には大学を優等で卒業した者には4年、普通で卒業した者には2年、陸軍砲兵官を2年勤めた者には2年加算される。
- 5 官吏の遺児は無縁の者よりも先に登用する習慣がある。

今日のわが国において年金支給年齢の引上げと共に、65才定年への動きが見られるが、ベルギーにおいては1880年代に既に官吏の退職年齢が65才以上であった点は注目されてよい。しかし、優遇措置や縁故採用は今日なら問題となろう。

ベルギーの**商業博物館**は首都ブリュッセルにあり、政府みずからが誇る施設である (p. 80)。商業博物館は五大州各地の物産から見本を陳列し、これに番号、産地、販売先、及び解説を標示している。陳列の列品目録はフランス或いは日本のような国別と、羅紗のような品物別に集録されている。商業博物館で陳列品の説明を聞きたい者は呼鈴を押すと、直ちに係員が駆けつけ詳細な説明をしてくれることになっている。

アンヴェルス港には**商品陳列場**がある。この商品陳列場は市民が共同で建設したものである。アンヴェルス港については次のように記されている。「アンヴェルス港ハ欧州著名屈指ノ良港ニシテ日々出入ノ貨物如雲輻湊シ其成大ナルコト実ニ人目ヲ驚カセリ」と (p. 44)。しかしながら、アンヴェルス港の商品陳列場にはわが国の物産及び製造品が陳列されておらず、この機会に出展すべく実際の取調べを行っている。日本からヨーロッパに輸出されていた雑貨、陶・磁・銅、漆器等は投売や不良品も混ざっており、市場では嫌われていた。安かろう悪かろうの時代があったのである。しかしながら、わが国への需用は日用品としてではなく、珍貴の品にあった (p. 45)。アンヴェルスの商品陳列場で取引すべき産物として、樋田書記官は米、菜種、煙草、紅花、絹織物、木蠟、魚油、鉾物を挙げている (p. 46)。

ルクセンブルグから発せられた欧州巡回特報第17号は需用品を原価で輸入する方便を報告している。欧州を巡回して、各地の製造所での原価を聞き、これに運賃・諸費用を加えてもわが国の仕入値段よりもはるかに安いことを聞き出している (p. 52)。今日も海外の商品を扱う業者によく見られることであるが、中間での複雑な流通過程でマージンが加算され、相当の割高になっているわけである。

当時のヨーロッパにあって、ベルギーは製造業が盛んであり、「村々里々至ル処煙筒林立トシテ其煙ヲ遠望スレハ野戦演習ノ大砲ヲ連発シタル後ノ如ク満目噴煙ナリ」 (pp. 52~53) と言われる程、煙の国であった。ベルギーの製造品はイギリス又はドイツからの注文も多く、注文者の商標をつけて輸出されていた (p. 53)。ベルギーの位置はヨーロッパの中心にあり、資本に富み、製造業で十分な利益をあげていたことも有利な条件として作用した。

パリ発の欧州巡回特報第23号はベルギー国の農業用分析所（農業試験場のことか、筆者注）を対象としている。農業用分析所では、地味、肥料、農産物、種子物の分析を行っている。ただ、分析所は国王より任命された委員（官吏にあらず）が管轄し、委員は名誉職であり俸給又は手当等を支給されない（p. 77）。以下、経費等について報告しているので省略する。

職工に関しては、フランス国の事例<sup>3)</sup>でも、ドイツ国の事例<sup>4)</sup>でも論じたが、ベルギー国においても職工学校を取り上げている。欧州巡回中、職工徒弟の事をよく調べているのも、明治維新後職工徒弟の風儀がみだれ、師弟の間に契約をなさしめる必要を感じたからであった（p. 87）。

職工学校での教科は大工、織工など当該地方に必要な工芸を教えるもので、学期は3ヵ年である。女子の場合は裁縫、シャツ、手堤、沓下、造花が本人の好む処にしたがって教授される。ただし、女生徒に限り、フランス語、読み書き、算術の初歩は必修であり、教育においていわゆる読み書きソロバンの必要性を思い起こさせる。授業料については男子は徴収せず女子のみ徴収する（p. 89）のは差別につながるといえる。この理由として男子は製作品により利益を学校にもたすが、女子は製品を自分の物とするからであると述べている。赤貧者からは授業料を徴収していない。ベルギー国工芸教授所は貧しい者に工芸を教える場所で、今日ではさしづめ公共職業訓練所といった施設であろう。生徒の多くは農業に従事しており、冬季に多く、夏に少ないのは当然のこととしている。

パリ発欧州巡回特報第33号はベルギー国の小作条令を詳しく伝えている。まず小作証文を地主と取りかわしたものは小作人に対して厳しい内容となっている（pp. 95～97）。小作地の又貸しの禁止は言うまでもなく、当初の見込みより耕地が狭いとか地味が劣る等の見込み違いがあっても契約を破棄できない。小作地を荒らしたり肥料を施さず地味を劣らせた時、地主は年度途中でも小作地を取り上げることができるし、弁償金を要求できる。ただし天災又は凶作の時は小作料の割引を要求できる等々である。口約束に係るものとしては、次のものがある。「麦、馬鈴薯等ノ六種ヲ輪転耕作スルノ目的ニテ植物ヲ作ルモノハ六ヶ年経サレハ地主ヨリ引揚クルコトヲ得ス。」（p. 97）六年輪作に入った時は途中で小作地を取り上げることができない事を示している。小作地を立去る時は後に入る小作人に差支えを生じないように耕耘、種子、蒔込、施肥の時期を怠り立去ることはできないとしている。この件につき、備考として、地主側は法制化を望んでいるが、実際は甚だ困難な事柄であり、地方の習慣で裁判すべしとしている（p. 98）。小作人の労力により地価を高めても、借地の年限が終った後は地主の元に帰すことも口約束である。

欧州巡回特報第38号は明治20年5月15日付でニューヨークから発信されている。ベルギー国農大<sup>5)</sup>に関する記事で、学理を講習する他実地の業務にも就かせている。学期は3ヵ年で入校試験は以下のように行われる（p. 103）。

- 1 満16才以上の者
- 2 中学校卒業の者
- 3 算術平法立法
- 4 読み書き
- 5 地球上の地理要略及本国の地理
- 6 植物学及び動物学の初歩
- 7 フランス語及びフランスの文章論

## 8 歴史

国語、算数、生物と並んで地理が試験科目に入っている点が注目される。しかし、実学中心の農大学校の教授科目には地理は入っていない。

ガン花園学校は全国で1ヵ所だけの花園学校であり、実地及び学理を講習している(p. 125)。実学中心の教科の中に、英語、フランス語、ドイツ語、地理書が加えられている。というのもそれらの教科が花の販売に必要な知識を提供するからである。特に、地理書が挙がっているのも世界市場を相手に花を販売する際、各国についての地理知識が大いに役立つからである。入学試験科目にも同様の理由で地理学の試験が加えられていることも興味を引く。

欧州巡回特報追加第6号にはベルギー国土地所有規則が詳しく報じられている(pp. 139~148)。例えば、ある土地の境に石垣を築く時には地中の石を取ってもよいが、建築物がある時は50メートル以内の石を取ってはならないとしている(p. 139)。建物の崩壊を招きかねないからである。又、「甲乙ノ地ヲ隔テテ丙地ヘ河水ヲ曳クトキハ甲乙地主之ヲ拒ムコトヲ得ス但通路ノ潰地ハ評価ヲナシテ其代価ヲ丙地主ヨリ償ハサルヘカラス」(p. 140)とあるように、他人の土地を通過して水を通す際の解決策を提示している。川の流れが変り、甲地が損をして乙地がふえた時、甲地主は乙地主に対し所有権を主張できないとしている(p. 14)。干拓等により開発すべき土地が生じた時は該当する村の共有地とすべきである(p. 141)。共有地に関しては、「一村ノ秣場ハ村内誰彼ノ差別ト畜類飼養ノ多少ニ制限ヲナス」(p. 142)として、村人には平等の権利を与えている。又1村又は数村の共有地で第1番の牧草を刈取りした後は何人でも放牧することができるとしている。両者の土地の境に果樹があり、果実が落ちたり、木の根が侵入して来た時は次の決まりがある。「甲地ノ果実乙地ニ落チタルトキハ乙地ニテ之ヲ取ルコトヲ得 甲地ノ樹ノ差根ハ乙地ニテ自由ニ掘除クコトヲ得」(p. 146)と常識的な判断を示している。

競争者の供出すべき報告とした箇所には、耕作の区分がある。すなわち、天然の牧場、人為の牧場、1年生の秣草、専門作としての根菜、間作での根菜、工業用植物(麻、コルザ)、小麦、裸麦、大麦、燕麦、ソバ、特記すべき他の植物、菜園、樹木栽培地、沼地などである(pp. 208~209)。耕作のために採用した廻転法(輪作のことか、筆者注)は何かを問うている。次に農具と題した章では、まず土地の整備を取り上げている。耕地は深く耕すかどうか、鋤の種類は如何か、耕地は平坦か斜面か等々である(pp. 209~210)。播種については、播種器を用いるか手播きか、又線蒔きか撒蒔きかどうか聞いている。その他、保存の方法、収穫、精製について質問項目をつくっている(p. 211)。農業経済と題した章ではビール醸造、蒸留、肥料生産等のような農村工業を行っているかどうかを聞いている(p. 211)。第5章は動物と題し、頭数を聞き馬については種馬、牝馬、去勢馬、二年未満の駒、掛合せの馬に分けている。牛については更に細かく、乳牛、1年以上の牝牛、1年以上の牡牛、1年以上の去勢牛、同じく1年未満の牡牛、1年未満の去勢牛、肥育用の牛かどうかを頭数で聞いている。他には、複産種用の牝猪、牡猪、食用の豚、綿羊、諸種の家きんなどを挙げている。更に、それぞれの家畜について質問している。馬については血統を示すこと、商用のために飼育しているのかどうか、1年間で何頭の馬を生産しているか、馬の飼育料はいくらかかるか等である。牛についてはより詳しく、まず牛の血統とそれを選んだ理由を示すこと、牛を労働に使っているかどうか、その割合、壮年に達した牛の平均価格はいくら位か、牛の飼料はどれ程かかるか、牛の食物に混合するために塩を使っているかどうか、牛は牧場飼育から舎飼か等を聞いている。豚については血統を示すことの他、

商品化のために肥育しているか、或は田畑の肥料のためだけに飼育しているのかどうかを聞いている。

第6章は肥料と題し、田畑での糞肥高を基に計算すること、糞肥は土中の穴又は地上に保蓄しているかどうか、蓋をしているかどうか聞くように言っている。購入肥料の種類と量はどうか、どの耕作に購入肥料を使うのか、馬屋及び牛舎より出た流動肥料を受けるための水溜りがあるかどうか、田畑にどれ程の石灰を使用しているかどうかを聞いている。第7章 改良と題した箇所は土地改良の事を指していると考えられるが、耕地に灌漑を行っているかどうか、又どのような方法により行っているかを問うている。第8章は仕事と題し、農業雇用者の数や賃銀ならびに支払いは金銭か物品によるのかどうかを聞いている (p. 217)。

以上、長々と論じてきた問題は競争者においてことごとく論及する必要はない。この科目はケースバイケースで増減すべきものとしている。しかし、関係者は本案において審査役の研究及び検査を容易に出来るとしている。

ベルギー国に関する巡回取調書の後半は諸規則に関する報告のうち洩れたものの補充になっている (p. 3)。重複する部分は省略して新たに問題とすべき点についてのみ検討することにした。

1つは**結婚契約書**に関する事柄である。筆者は結婚契約書からみた相続の様相について、1755年から1757年にかけての公証人の記録を基にアルザス農村の例で分析したことがある<sup>5)</sup>。巡回取調書の中で妻の保證物と題した所には次の記述がある。

「人ノ妻タル者ハ其嫁資及婚姻契約ノ安全ノ為メ結婚契約ニ掲ケタル財産ニ付キ特別ナル書入質権ヲ有スヘシ」(p. 343)として、結婚契約書を取りかわすことをすすめている。この諸入質権は結婚式挙行の前に夫に記入させ、その記入の日より効力を生ずるとしている。不動産、保証の物件については記入時の金額を示すべきである (p. 344)。

1883年12月立法院において可決した**農業貸付金**に係る法律は1884年4月15日に布告され、5月11日のモントール新聞紙上で公表されている (p. 386)。農業貸付金を扱うのは貯金総務局であること、貸付金の利息は4パーセントと定めている。この法律は債主の貸付人には資本が十分安全であることを保証し、借受人には低い利息で資金を得る方法を与えることを目的としている。借受人は肥料、種子、家畜、改良機械等を購入し、集約農業を行うことにより最大の利益が得るとしている。財務に係る会社が貯金局の利息よりも低い利息で農業者の立替えをしてはならない (p. 388)。貸付は割引手形によるか農業上債主の特権を保証して貸借契約をするかして行う。農業貸付金に関しては、日本帝国のための参考として、農業上債主の特権又は他の動産抵当又は書入質を扱っている (pp. 453~465)。しかし、本稿は地理学の領域から欧米巡回取調書を分析している以上、あまり詳しく立ち入ることはできない。若干の点だけを指摘するにとどめたい。

1つは農業上債主の特権を保証とする貸付は私的証書、すなわち貯金局と負債主である農業者との関係における証書で行なうことである。又は公けの証書、すなわちこの二者により公証人に出た証書を以て行う。以下、公証人についての説明が続いている。公証人は終身官であり、請求を受けた時は職務を行う義務がある (p. 454)。公証人の見習、修業期間は6年である。公証人は国王から任命される (p. 455)。

新聞の抜粋を特報に利用した例を1つ紹介する。前述したモントール新聞の1885年9月29日発行の**農業巡回教師**(農業改良普及員のことか、筆者注)に関する記事である (pp. 491~496)。

農商工務大臣の稟告により令達されている。

第1条で農商工務省内に農業巡回教師の一团を置くこととされている (p. 491)。農業巡回教師の任務は農業に関する学術の教授だけでなく方法を実際に行い、民間に普及することにあった。耕作者と直接会い、無料で教えた。もち論農業巡回教師は下級3,500フラン(当時の日本円で700円)、中級4,000フラン(800円)、上級4,500フラン(900円)の俸給を得ていた。旅費としては年々750フラン(150円)を支給されていた (p. 492)。

同じくモニター新聞の抜粋(1886年7月13日発行)には、農業巡回教師に対する訓令が示されている。農業巡回教師が置かれたのも、不況により農産物の価格が変動し国民が困難な状態に追い込まれたからであった (p. 513)。1870年の普仏戦争後、工業が繁栄した時期、農業は豊作が続いて農産物の価格が暴落した反面、地価、借地料は大いに騰貴した。そのため職工は農業労働を放棄して賃銀の高い工業労働に従事した (p. 514)。海外の国々からヨーロッパ市場に大量の農産物が輸出されたことも、穀類や農産物の価格の低下を招いた (p. 515)。ベルギーと競合する国々の農業経済状況を調べて、ベルギーより勝っている点は次の3点であった。

- 1 土地の売値が低廉であること
- 2 元来豊かな土地であること
- 3 農業の機械化が進んでいること

ここでわが国と競合する国々と比較し、自然の肥料及び人工肥料を施せば耕地の平均収穫高は競合する国の収穫高を越えると見ている (pp. 516~517)。そして、わが国の農産物の価格をさげる最も良い方法は肥料の購入額を増加し、収穫を改良することにあるとしている。ちなみに肥料の消費量(1996/97年度)は耕地1 haあたり360.5kgであり、世界で第8位である。

(1999/2000世界国勢図会第10版による。)又、機械化も緊要なこととしている (p. 517)。ベルギーの農業を取調べながらも、わが国農業との比較を絶えず念頭に置いていることがわかる。

ベルギーにおける改良耕作法の開発は次の2点によって得ることができる。

- 1 農民に合理的農業の内容を普及すること
- 2 巨大な資本を投下すること

ただ、小学校の教育しか受けていない者に改良耕作法の開発に必要な事項を説明しても理解してもらうことはできないとしている。又、第1回の講義と第2回の日時が離れているために、第1回の内容を忘れている (pp. 518~519)。従って、教育の効果を高めるには短期間で関係ある講義を連続して開くことが必要である (p. 519)。この点は今日の教育にも当てはまろう。学年暦にとらわれる余り、長い休みを挟んで1~2回の講義を追加し、試験を行うことにどのような教育効果があるのか。

農業巡回教師は講義するだけでなく、農村を巡検し、実施の状況を点検したり、定期市や日常の市場に行って耕作者と話す機会を求めるべきである。方法がよければ談話の方が学理による授業よりも多くの結果をもたらすと (p. 520)。一方通行的な講義よりもディスカッション・対話中心の授業の方が効果をもたらす点と相通ずるものがある。

農民に農業教育を普及させるには農業巡回教師の他、試験所を設置することにある (p. 521)。試験所は2種類に分けるべきである。第1は農業実験所の開設である。第2は農業試験場の開設である。第1の農業実験所は既得の知識を民間に伝播する施設であり、第2の農業試験場は新たな事実を発見し、農学の前進と農業の進歩とを助成することにある (p. 523)。

ブリュッセルに設立された女子職業学校の規則を見ると、第1章が教育となっている (pp.

562～563)。第1条で、当職業学校の教育として普通の学科と女子の従事すべき種々の手仕事及び職業を授くべき特別の学科とを含むものとしている。第2条は普通学科を挙げているが、フランス語、フランドル語、数学、史学及び地理学、博物学大意、修身教育、衛生術及び家内経済学の大意、書法、画学及び裁縫、唱歌並びに体操と、今日の科目名と異なるものもあるが大よそは今日と似た教科を教えている。フランス語とフランドル語はさしづめ国語であるが、2つの言語を習得させる点にベルギーの国情がわかう。

### 3 お わ り に

本稿はフランス国、ドイツ国の事例に続き、明治20年前後に欧米を巡回した農商務省の谷大臣以下6名が各国で調査し、蒐集した資料を取りまとめた記録、「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」を地理学の立場から分析し、考察を加えたものである。今回は第五巻、ベルギーを扱った部分を取り上げた。分析の結果、明らかになった主な知見は次の通りである。

- 1) 欧州を巡回して、各地の製造所での原価を聞き、これに運賃・諸費用を加えてもわが国の仕入値段よりもはるかに安いことである。中間での流過程でマージンが加算され、割高になっている。
- 2) 職工学校での授業料は男子からは徴収せず、女子からのみ徴収するのは差別につながる。この理由として男子は製作品により利益を学校にもたすが、女子は製品を自分の物とするからであると述べている。
- 3) 小作地の又貸しの禁止は言うまでもなく、当初の見込みより狭いとか地味が劣る等の見込み違いがあつて契約を破棄できないなど、小作証文を地主と取りかわしたのは小作人に厳しい内容となっている。
- 4) ガン花園学校では、実学中心の教科の中に、英語、フランス語、ドイツ語、地理書が加えられている。特に、地理書が挙げられているのも世界市場を相手に花を販売する際、各国についての地理知識が大いに役立つからである。
- 5) 川の流れが変り、甲地が損をして乙地がふえた時、甲地主は乙地主に対し所有権を主張できない。
- 6) 結婚契約書は結婚式挙行の前に夫に記入させ、その記入の日より効力を生ずる。不動産、保証の物件については記入時の金額を示すべきである。
- 7) 農業巡回教師の任務は農業に関する学術の教授だけでなく方法を実践し、民間に普及することにあつた。耕作者と直接会い、無料で教えた。方法がよければ談話の方が学理による授業よりも多くの結果をもたらす。

本稿ではフランス国、ドイツ国の事例に続き、巡回取調書の分析と考察を進めて来たが、担当する事務官の得意とする分野を中心に取調べが進んだためであろうか、ベルギー国の事例は前2ヵ国とは必ずしも同一ではなかった。フランス国の取調べに見られた比較文化論的考察はなく、せいぜい農業、工業の振興策でわが国との比較を試みる程度であつた。むしろ、ドイツ国のように諸規則、条令を中心に述べてきている。ベルギー国において、各種学校の試験科目、授業科目において地理学が重視されていることの指摘、教育に踏み込んだ意見などは前2ヵ国においてよりも開陳されている。本論では太字で項目を挙げたが、フランス、ドイツ、ベルギーの事例で取調べの内容が重なったのは比較的少ない。その国で手に入る諸規則、条令

を次々と翻訳し、コメントを加えて本国の日本へ送付していたということである。

### 注

- 1) 大嶽幸彦 (1997) : 「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——フランス国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第17巻, 第1号, 319~330
- 2) 大嶽幸彦 (1999) : 「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——ドイツ国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第18巻, 第2号, 645~654
- 3) 前掲1) p. 325
- 4) 前掲2) p. 650
- 5) 大嶽幸彦 (1979) : 『アルザス農村の歴史地理学研究』大明堂, pp. 46~47, pp. 129~134



The Analysis of “Ohbei Junkai Torishirabesho”  
—“Reports of Investigation on Europe and the United States”—  
from the Angle of Geography  
—focusing on some Examples in Belgium—

Yukihiko OHDAKE\*

**ABSTRACT**

The object of this research consists in the analysis of “Ohbei Junkai Torishirabesho” --reports of investigation on Europe and the United States-- published in the 21th year of the Meiji Era (1888).

The author has analysed the contents of V volume. He has quoted some examples of geographical matters, and tried to give them some consideration.

---

\* Division of Social Studies, Department of Humanities and Social Sciences